

ALWAYS 続・三丁目の夕日

2007(平成19)年10月16日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★★



監督・脚本・VFX＝山崎貴／出演＝吉岡秀隆／堤真一／小雪／薬師丸ひろ子／須賀健太／堀北真希／小清水一揮／三浦友和（特別出演）／小日向文世／小池彩夢／平田満／もたいまさこ／上川隆也／渡辺いっけい／手塚理美／藤本静／貫地谷しほり／浅野和之／浅利陽介（東宝配給／2007年日本映画／146分）

……大ヒット作の続編をつくるのは難しい。そこで続編は、昭和の風物詩の他、茶川の芥川賞をめぐるスリルとサスペンス性を重視した物語に……？
またヒロミの選択も重要な論点。さらに、新登場のお姫サマや六子の同級生武雄の生き方にも焦点が……。しかし、最後はやっぱり東京タワーとあの美しい夕日。昭和33年もよかったが、昭和34年もやっぱりいい年に……。

ホントに良かった……

2005年11月に公開された『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）は、広く日本国民の共感を呼び、第29回日本アカデミー賞の監督賞、作品賞をはじめとする各賞を総ナメにする結果となった。貧しくても夢もっていた昭和の時代。そして東京タワー建設中の昭和33年。下町に生きる人々が常に前を向いて生きていたことを実感させてくれる心温まるすばらしい映画だった（『シネマルーム9』258頁参照）。

そんな中、全く予定されていなかった続編が製作されたわけだが、大成功を収めた作品の続編づくりが難しいのは当然。さて、翌昭和34年の時代に生きる主人公たちを描く『続・三丁目の夕日』も、第1作と同じ、あるいはそれを上回るような感動を呼ぶことができるのだろうか……？

主人公たちは……？ 昭和34年の焦点は……？

第1作での主人公は、小説家を目指しながら今は駄菓子屋の店主をしている茶川竜之介（吉岡秀隆）と、そのお向かいに住む鈴木オートの社長鈴木則文（堤真一）の2

人。そして、売れない小説家に絡むのが、あの時代にはありえない八頭身美女(?)の石崎ヒロミ(小雪)と、実父の川瀬康成(小日向文世)に寄りつかず、茶川と一緒に暮らす少年古行淳之介(須賀健太)。

他方、鈴木家には、私の強い亭主を支える妻トモエ(薬師丸ひろ子)とわんぱく坊主の一平(小清水一揮)、そして東北から集団就職で鈴木オートに住み込みで働いている健気な女の子星野六子(堀北真希)がいた。こんな人々の東京の下町における昭和33年の生活は、あの美しい三丁目の夕日とともにひとまず終了したわけだが、時代は進むもの。

翌昭和34年を舞台とした『続・三丁目の夕日』では、茶川の芥川賞受賞がなるのか……? 茶川とヒロミの恋が成就するのか……? が大きな焦点。そしてまた、新たに一平の「はとこ」として登場する女の子、鈴木美加(小池彩夢)を加えた鈴木家にはどんな波乱が……?

芥川賞の受賞はなるのか……?

続編は第1作以上にスリルとサスペンスに富んだ作品に……? それは、かつて芥川賞の最終選考に残ったことを唯一の誇りとして、今なお一流の小説家を目指している茶川の芥川賞の受賞がなるか否かに、夕日町三丁目の人々の注目が注がれるから……。

第1作ではそんな茶川に何かと反発していた鈴木だったが、続編では淳之介と一緒に暮らす茶川の人柄の良さを認識できたためか、茶川の創作活動に協力的。そればかりか淳之介の父親川瀬から茶川がバカにされると猛反発し、淳之介の養育費を賭けて芥川賞へ再挑戦しようとする茶川を妻トモエと共に全面的にバックアップすることに。すなわち茶川が執筆活動に集中する間、淳之介は鈴木家で寝泊まりすることとし、茶川の食事はすべてトモエが面倒をみることになったのだ。しかして締切りギリギリになって完成した作品は……?

ここまでは想定範囲内のストーリーだが、三丁目にあるトリスバーで鈴木たちと知り合い、茶川の作品に感激したという芥川賞の社内委員の松下忠信(浅野和之)が登場するに及んで、話はスリルとサスペンス性を帯びていくことに……? 松下の話では、芥川賞の選考については純文学的評価の他、選考委員との人脈や接待が大切とのこと。そりゃ、現在大問題となっている防衛省の前スーパー次官守屋武昌と山田洋

行とのゴルフ、飲食接待のあり方をみれば、なるほどと思えるもの。しかし、その結末は……？

論点設定 その1——淳之介をめぐる茶川と川淵との確執は……？

前作は昭和33年という時代を懐かしく思い出す風物詩が満載で、それにドブプリつかるだけでも心地よいものだったが、続編はその延長だけではダメ。そこで懐かしい風景としては、①韓国チョンゲチョンの清溪川復元事業の成功例に学んで、高速道路の撤去が計画されている東京日本橋の原風景、②銀座日劇前、③羽田空港見送りデッキ、などを映し出すにとどめ、ストーリー構成、とりわけ私流に言う論点設定に重点をおいている……？

論点設定その1は、淳之介の養育をめぐる茶川と川淵との確執。夕日町三丁目に高級車が乗り入れてくれば、それだけで異様な風景だから、近所の人々が集まってくるのは当然。そんな注視の中で展開される議論の論点は、川淵が主張する、「優秀な子にはそれに相応しい教育を受けさせなければならない。これは大人の義務です。あなたにそれが出来ますか」というもの。たしかに、お米代が値上がりしたので学校の給食費を納めず我慢している淳之介の姿をみれば、正常な家庭環境といえないことは誰よりも茶川自身が自覚しているもの。したがって、この論争は圧倒的に川淵が有利なのだが、仮に茶川が芥川賞を受賞すれば話は別。お金もガッポリと入ってくるから、淳之介の教育も大丈夫というわけだ。

そんな淳之介の養育をめぐる茶川と川淵の論争が芥川賞への再チャレンジとなり、そして「ある事件」にまき込まれていくことになるのだが……。

論点設定 その2——お姫サマの成長は……？

続編は冒頭ハチャメチャなシーンから始まるから、まずはそれにご注目！ その後、続編は鈴木の親戚の鈴木大作（平田満）が事業の失敗からしばらく東京を離れダムで働くことになったため、一人娘の美加を鈴木の家に預かってもらうというストーリーから幕が開くことに。集団就職で東北地方から夢を描いてやってきた六子が第一作でちょっと失望したように、鈴木則文は社長とはいっても超零細企業の社長だから、貧乏人。それに対して鈴木大作は失敗したものの大きな事業をやっていたらしく、美加はお姫サマ風でわがままそう……？

当初はネコをかぶっていたが、鈴木家として精一杯張りこんで用意した「すき焼き」に対して、「すき焼きは牛肉でしょ。これは豚肉。これはすき焼きじゃないワ」と発言するに及んで雰囲気は一変……。さらに、「美加の家のテレビはこの三倍はあったわ。ピアノもないし、油みたいな変な匂いはするし、もういやこんな家。成城の家に戻りたい」と言ったから、則文とトモエは唾然。一平が「おまえ、人んちに世話になっというて、何言ってるんだよ。おまえのお父ちゃんがジギョウに失敗したからいけないんだろ」と反論すると、美加は泣き出して2階の部屋へこもってしまった。こりゃ、先が思いやられるワ……。

続編が示す第2の論点は、そんなお姫サマ美加の成長ぶり。「自分の子供と思って接するワ」と最初に言ったトモエは、その宣言どおり、掃除、洗濯、後片づけなど一平と同じように美加に対して用事を言いつけ、ホントの家族同様の扱いを。最初はこれに反発し当たり散らしていた美加だったが、それまで知らなかった母親のような愛情に触れ、また、たくましく生きていく一平や茶川と一緒に暮らしたいため当然のように家事仕事をやっている淳之介の姿に触れていく中、美加はどのように成長を……？

論点設定 その3——茶川と金持ち、ヒロミはどちらを選択……？

今ヒロミはゴールデン座で踊り子をやっているが、それはなぜ……？ ここで皆さんに思い出していただきたいのは、前作で登場した、箱だけのエンゲージリングという感動的なシーン……（『シネマルーム9』267頁参照）。ヒロミに対して本格的にプロポーズしたい茶川が、先立つものがないためやむをえずとった方策がそれだったわけだが、そんな気持だけでは人間は生活できないもの。したがって、ヒロミの今の踊り子としての生活は、生きていくためやむをえないものだ。ところが、平成の世でも日本人離れした顔と肢体の持ち主である小雪だから、昭和33年、34年当時の平均的女性のスタイルと比べれば、月とスッポンであることは明らか。したがって、ホントにあの時代にこんな踊り子がいたら、客に大受けするのは当たり前。

金持ちの大橋（渡辺いっけい）はそんな客の1人だったが、これが意外と真面目。今の時代なら、金にまかせてあの踊り子をモノにしようという発想になるはずだが、この金持ちのダンナは真剣にヒロミとの結婚を願い、ヒロミの返事を待ち続けていた。金で強引に引っぱられれば反発もするだろうが、金持ちのダンナからこういう姿勢で

迫られると女は弱いもの。さて、ヒロミは……？

他方、芥川賞の受賞確実となった発表の前日、鈴木から「一番うれしい時、誰に隣にいてほしい？」と問われた茶川は一大決心をして鈴木車でゴールデン座に向かったが、そこで茶川と鈴木が見たものは……？

そんなヒロミが、ある日突然茶川の家を訪ねてきたから、留守番をしていた淳之介はビックリ。ヒロミがやって来たのはライスカレーをつくるためということだったが、さてその真意は……？

さあ、ヒロミは、茶川と金持ちのダンナのどちらを選択するのだろうか……？

論点設定 その4——武雄の夢と挫折は……？

私の大好きな堀北真希扮する六子は前作ではかなりのインパクトがあったが、続編では少し控え気味で、その代わりに「日本一のコックになるため」一緒に集団就職で上京してきた中山武雄（浅利陽介）がキーマンとして登場する。そう簡単に日本一のコックになる道が開ければ苦労はないもので、武雄が最近時々日町三丁目に顔を出して六子の様子を探っているのはどこか怪しそう……？

所詮田舎者だから、ええカッコしようとしてもあまり決まっていないところが愛嬌だが、それでも武雄は一生懸命おしゃべりして六子をデートに誘いたいらしい。さて、こんな同郷の2人に東京で恋の花が咲くのだろうか……？ そういうストーリーにすることも可能だが、続編はそういう路線はとらず、ここでもスリルとサスペンスに富んだ展開に……？

ある日六子が偶然見かけたのは、地面に座った武雄がインチキ物の商品を販売して、親方から手数料をもらっている姿。これは一体ナニ……？ 日本一のコックになる夢はどうしたの……？ 根が単純で真正直な六子が、いきなりそんな風に武雄に対して喰ってかかったのは当然。しかして、その時六子が見た親方の顔はどこかで見たあの顔……？ これは一体どういうこと……？

則文がはじめて東京タワーに……

近くにある名所にはいつでも行けるからと思って行かないことがよくあるものだが、鈴木がそれ。息子の一平は好奇心いっぱいだから、お小遣いを貯めて近いうちに行こうと思っていたらしい。ところが映画の終盤に到り鈴木大作から電話がはいり、ある

会社がいい待遇で迎えてくれることになったので、美加と一緒に暮らすことになったとのこと。つまり、『小さな恋のメロディ』（71年）風の展開をみせていた（？）一平にも、美加とのお別れが迫ってきたわけだ。お別れともなると餞別が必要。そこで一平が考え抜いた餞別とは……？

また、これで小遣いを使い果たしてしまったため、しばらく東京タワー見学はお預けと思っていると、「今日は私がおごってあげるから行こう」と六子が言ってくれたのはラッキー。やっぱり、六子も武雄がすっかり立ち直ったのでうれしいようだ。

ところで、ここで六子から「社長も一緒に行きましょう」と誘われて困惑気味なのが則文。どうもこれは、ストーリーの前半小遣いを貯めている一平に対して、「俺は興味ないよ」と言っていた則文が、「父ちゃん、高いところが恐いだろう……？」と反撃されたのが的を射ていたらしい……。トモエも一緒に、みんなで楽しく東京タワーに上ったものの、はしゃぎながら動き回る一平、六子、トモエに対して則文だけは足がすくみがち……。なるほど、則文が今日はじめて東京タワーに上ったというのは、そういう事情だったのか……？



ラストはやっぱり……

前作のラストは「三丁目の夕日」にふさわしく、東京タワーの向こうに沈んでいく真っ赤な美しい夕日を眺めている鈴木一家の姿だったが、さて続編は……？

続編では、『君の名は』（53年）ばりに（？）、トモエが昔の恋人（？）山本信夫（上川隆也）とバツリ出会い、東の間の再会を喜び合うというシーンを登場させたが、これは高速道路が建設される前の、大きく空の広がった東京日本橋の風景を印象づけるため……。また、茶川家でライスカレーを作ったヒロミが荷物を抱えて東京駅から乗り込んだのは、こだま号。といっても、これは新幹線のこだま号ではなく、特急こだま号であることに注意。この特急こだま号が走り始めたのは昭和33年11月で、東京・大阪間を6時間50分で結んでいたとのこと。こだま号に乗り込んだヒロミはそのまま大阪方面に……？

そんなこんな物語の中、迎えるラストは当然すべてハッピーエンド……。また、そんな物語のラストを飾るシーンはやっぱりこれ。東京タワーをバックにしてゆっくり沈んでいく美しい三丁目の夕日をタップリと楽しみながら、夕日町三丁目の人々の営みの余韻にじっくりと浸りたいものだ……。 2007(平成19)年11月25日記